

令和元年6月19日現在

機関番号：14403

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：15K13251

研究課題名(和文) 小児緩和ケアの対象となる子どもにおけるホスピス内での学びがもたらす効果

研究課題名(英文) Effects of learning in hospices among children receiving pediatric palliative care

研究代表者

平賀 健太郎 (Hiraga, Kentaro)

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：30379325

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、小児緩和ケアの対象となる子どもに学び支援を行う人材を養成し、その効果を明らかにすることを目的としていた。研究期間を通じて毎年、緩和ケアの対象となる子どもに学び支援を提供するボランティア養成プログラムの計画・実施を行った。各プログラム内容は前年の取り組みを参考にしてよりよいものへと修正を行った。さらに、プログラムに参加した者が、ホスピス施設で子供に学び支援を行った効果についてインタビューと参与観察をもとに検証を行った。以上の結果をもとに小児緩和ケアの対象となる子供への学び支援の多様な役割について言及した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の取り組みでは、緩和ケアの対象となる子供に学び支援を行う学生ボランティアを養成しながら、子供のホスピス施設にて継続的に学生が活動する機会を提供してきた。学生ボランティアの振り返りや利用者の様子からは研修が効果的であったこと、また研修を活かした学び支援が行われたことが示唆された。そして、緩和ケアを必要とする子どもの個別的な学びの役割やその意義についての言及を行った。本研究の取り組みで得られた成果は、他の小児緩和ケア施設において学びを提供する人材育成プログラムやその後の活動を検討するうえでの参考資料となることが期待される。

研究成果の概要(英文)：This study's objective was to train personnel to provide learning support for children receiving pediatric palliative care and to clarify its effects. In every year of the study period, a training program was planned and implemented for volunteers to provide learning support to children receiving palliative care. The content of each program was amended to make improvements with reference to the results from the previous year. Furthermore, the effects of the program on participants carrying out learning support with children in hospice facilities were verified based on interviews and participant observations. As a result, the diverse roles of learning support for children receiving pediatric palliative care were clarified.

研究分野：病弱教育

キーワード：小児緩和ケア ボランティア 研修 子供のホスピス 学び

1. 研究開始当初の背景

(1) 小児医療の進歩によって、小児がんや小児神経難病等の命を脅かされる病気 (LTC : Life-threatening Condition : 以下、LTC) を有する子供たちの入院期間は短縮化傾向にあり、結果として、退院後も継続的に在宅で治療管理を行いながら暮らす LTC 児が増加している。近年では、入院中は院内学級等での教育サービスが提供されやすくなっている一方、退院後は、頻回な外来通院や易感染性等のために学校に十分に通えなかったり、通っている場合も学習面や人間関係等で厳しい状況に陥っているケースがあることが注目され対応が求められている。

(2) 我が国では LTC を有する子供等への小児緩和ケアの充実が重点課題となっており、それぞれの領域で多様な取り組みが進展している。研究開始当初には「子供のためのホスピス施設」の設立に向けた動きがいくつかの地域で活発化していた。今後、我が国の小児の緩和ケアの方向性を検討するうえでは学びの要素を抜きにして語ることは難しく、医学的配慮や心理社会的状態に即応しながらの学びが提供できる人材を養成し、その効果を検証することが重要であると考えられた。なお、本研究で使用する「学び」とは、「学習」や「教育」に近い言葉として用いているが、「学び」には「子ども自身の主体的な営み」、「学び手にとって何らかの意味で『よくなる』」ことが意図されるため (佐伯, 1995) 本取り組みの趣旨に沿った「学び」という表記を用いる。

2. 研究の目的

本研究の主要な目的は、小児緩和ケアの対象となる子供にとってのホスピス施設内における学びの提供の役割を明らかにすることであり、具体的には以下の2点であった。1点目については緩和ケアの対象となる子供に学びを提供するボランティア研修プログラムを構築・実施し、効果の検証を行った。主な測定指標は 研修が受講者に与えた影響、受講者の活動への自信の程度の変化、活動における援助要請能力とした。2点目については研修後のホスピス施設内での学びの提供の役割と意義の検証を行った。

3. 研究の方法

(1) 研修プログラムの効果測定

調査内容: 各講座終了後に質問紙を配布し、各回の内容の感想について自由記述で回答を求めた。分析方法はテキストマイニングによる分析を行った。KH coder を用い、テキスト化した自由記述内容の文章内にある語句の出現回数を算出した後、共起ネットワークのコマンドを用いて、語の関連性の分析を行った。

調査内容: 「学び支援への自信を程度」を測定する15項目を設定し、5件法で回答を求めた。研修開始前と研修終了後にアンケート用紙を配布し、因子分析を行った。また対象者に振り当てた個人番号を用い、研修前後の対象者内要因の変化を検討した。

調査内容: 被援助志向性尺度 (田村・石隈, 2001) の各項目について5件法で、援助要請スキル尺度 (本田, 2010) についての各項目について4件法の評定を依頼した。援助希求を扱う回の前後にアンケート用紙を配布し、対象者に振り当てた個人番号を用い、対象者内要因の変化を検討した。

(2) 研修後のホスピス施設内での学びの提供の役割と意義の検証

調査対象者は、研修終了後にホスピス施設での活動を継続的・定期的に行ってきた学生とした。データの収集方法としては参加観察とインタビューを用いた。参加観察及びインタビュー共に、月に1度行われた集団プログラムの活動に焦点を当てた。

4. 研究成果

(1) 研修プログラムの効果測定

得られた感想には、グループでのロールプレイやワークに関する内容が多く認められた。病気の子供や家族、あるいは支援する立場の心理状態を疑似体験することによって深い理解が得られ、印象に残りやすいことがうかがわれた。自らの子供との関わり方を想像する中で、過去の自分の言動を振り返り今後の活動に活かそうとする姿勢が多数認められて。以上より、今後の研修会においてもアクティブラーニングを取り入れることの有効性・重要性を指摘した。

因子構造を解明するために因子分析を実施した。因子負荷量およびスクリープロットの落ち込みと、解釈可能性から総合的に判断した。研修前と研修後の学生の自信の程度の変化を分析するため、因子ごとに平均値を算出し、 t 検定を実施した。因子分析によって以下の4つの因子が抽出された。「自己・他者の心理面の理解」、「子どもの学習への配慮」、「子どもの身体面・医学的配慮の理解」、「子どものホスピスの意義理解」であった。 t 検定の結果、全ての因子において研修後の方が、有意もしくは有意傾向で自信が向上していた。

研修を受けることで、「援助関係に対する抵抗感の低さ」、「援助要請スキル」の2つは向上し、「援助の欲求」においては低下することが明らかになった。研修後は多くの参加者が相談することに前向きとなり、ただ助けて欲しいと「思う」だけでなく、実際に相談するという「行動」に移すことができるようになったためと考えられる。ケアを担う立場である大学生が精神的健康度を保ちながら活動し続けることは、ホスピス施設を利用する子供たちにも安心感を与えることが予想される。今後の課題として、実際に活動するボランティア学生が、援助要請を具体的にどのように行っているのかを明らかにすることの必要性を指摘した。

ボランティア研修会は毎年開催され、研究期間全体を通じて総計159名が受講した。研修の内容や回数は、前年度の結果（研修後の評定やホスピス施設での活動）に基づいてブラッシュアップがなされた。大きな変更点としては、研修日数が5日間から3日間へと変更された（研修回数は変更なし）こと、研修内容にきょうだい支援に関する内容、ボランティア学生のメンタルケアに関する内容、実践例のビデオ視聴に基づいた解説が加えられた点である。各年の講義内容は関係者の討議によって決定され、狭義の学習支援に関する内容のみならず、医療、福祉、心理社会面など多様な側面が扱われた。各回の内容は、知識と実践とが結びつきやすいようにグループワークやバズセッション、ロールプレイ等を取り入れたアクティブラーニングの要素を組み入れた。本研究の研修に参加した学生の大部分は、将来的には、院内学級や小児病棟での勤務を希望するものが多く、そこでは生命を脅かす疾患を持つ子供や難病の子供と関わる機会も予想される。本研究の研修に参加しホスピスで活動を行うことで、病気の子供の心身に即応したかわりの出来る実践力を獲得した人材が教育現場に輩出されることは、今後の病弱教育や小児医療の充実に貢献することが期待される。

（2）研修後のホスピス施設内での学びの提供の役割と意義について

ボランティア学生は利用者に対して「共にいることで安心感を提供すること」、「身体接触によるコミュニケーションを行うこと」、「大人の失敗する姿を意識的に提示すること」、「子供の選択を重視した関わりを行うこと」、「活動に対して正のフィードバックを行うこと」、「未来への展望イメージを与える」といった事前研修で重視されていた関わりを提供しており、利用者が「よい人生」を送るために重要な役割を果たしていることがうかがわれた。対象者の中には活動する中でボランティアとしての自分の役割に意義を見出しにくくなる時期があったが、事前研修で学んだ内容を振り返ることで自らの果たす役割についての意味を導き出していた。また、利用者の心身に即応しながらの関わりが提供されるためには、ボランティア学生が心理的に安定した状態で活動することが重要であり、そのためには「他ならない自分だからこそ」できた関わりを本人が自覚できるようなフィードバックを行うことの出来る存在が重要であることを指摘した。

（3）まとめ

本研究の取り組みでは、緩和ケアの対象となる子供に学び支援を行う学生ボランティアを養成し、子供のホスピス施設に継続的に学生を派遣してきた。学生ボランティアの振り返りや利用者の様子からは研修が効果的であったこと、また研修を活かした学び支援が行われたことが示唆された。そして、緩和ケアの対象となる子供にとっての個別的な学びの役割を検証する中で、緩和ケアにおける学びの役割は、絶対的なものがあるわけではなく、刻々と変化する子供の心身の状態や、家族の思い、配置されているスタッフの各専門性によって、相対的に決定されていくことがうかがわれた。本研究の取り組みで得られた成果は、他の小児緩和ケア施設において学びを提供する人材育成プログラムやその後の活動を検討する際の参考資料となることが期待される。今後は、LTCの子供の状態に即応した支援を行うことのできる多様な人材を継続して育成し、子供のホスピスで求められる内容や時期に応じて適材適所で活躍できるシステムを構築することが求められる。

<引用文献>

- 「学ぶ」ということの意味（子どもと教育）佐伯 胖，岩波書店，1995。
本田真大・新井邦二郎・石隈利紀 援助要請スキル尺度の作成 学校心理学研究，10，33 - 40，2010。
田村修一・石隈利紀 指導・援助サービス上の悩みにおける中学校教師の被援助志向性に関する研究—バーンアウトとの関連に焦点をあてて— 教育心理学研究，49，438 - 448，2001。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 11 件)

Kazuteru Niinomi, Masakazu Soejima, Kentaro Hiraga, Shoko Kodama, Shin Okazaki, Shigeki Nakao, Effectiveness of volunteer training program on the learning support of children in hospice palliative care, American Journal of Hospice and Palliative Medicine, in press.

中尾繁樹・村田健治, 日本の個別の指導計画とニューヨーク市の IEP についての比較検証, 関西国際大学教育総合研究叢書, 12, 11-20, 2019.

岡崎 伸, 難病の子ども達への発達支援とあそび ~ 新規の居宅訪問型児童発達支援に期待すること ~, 難病と在宅ケア, 25, 20-24, 2019.

岡崎 伸, 重篤な神経疾患を抱える子どもの緩和ケア-終末期を見据えた話し合いについて 疾患の軌跡を意識した関わり, 脳と発達 50 (suppl) S181, 2018.

岡崎 伸, 民間での難病児支援 "スペシャルキッズ・スペシャルケア" の提案, 難病と在宅ケア, 50-54, 2017.

岡崎 伸, 非がん疾患の子どもへの小児緩和ケア ~ 小児神経医でかんがえていきたいこと ~ 小児緩和ケアの理論とエビデンス, 脳と発達 49(suppl): S168, 2017.

新家一輝, 病院で子どもの学びを支える看護, 小児看護, 39, 1384-1389, 2016.

平賀健太郎, 病弱教育とは: 入院中および地域で暮らす病気の子どもの支える教育システム, 小児看護, 39, 1356-1360, 2016.

岡崎 伸, 小児医療者からみる「病院のなかの教育支援・復学支援」, 小児看護 39, 1379-1383, 2016.

岡崎 伸, 小児緩和ケア ~ 重篤な疾患や障害を抱える子どものために小児神経科医としてできること ~ 急性 / 慢性疾患について最善のケアや方針を提供するための対話 (コミュニケーション), 脳と発達 48(suppl): S204, 2016.

中尾繁樹, 障害のある子どもたちへの教育の現状と課題, 日本看護倫理学会誌, 8, p88, 2016.

[学会発表](計 6 件)

岡崎 伸, 重篤な神経疾患を抱える子どもたちのための小児緩和ケア 苦痛症状のマネジメント, 第 61 回日本小児神経学会学術集会, 名古屋, 2019.

岡崎 伸, 小児神経科医が知っておきたい緩和ケアのエッセンス 症状緩和, 第 60 回日本小児神経学会学術集会, 東京, 2018.

坂田 和, 兒玉尚子, 平賀健太郎, 副島賢和, 新家一輝, 岡崎 伸, 中尾繁樹, こどものホスピスで活動予定の大学生を対象とした研修における教育評価 - テキストマイニングを用いた感想の分析 -, 日本育療学会第 21 回大会, 岐阜, 2017.

岡崎 伸, 子どもの緩和ケアと、忘れがたき子どもたち, 第 29 回日本発達心理学会, 宮城, 2017.

岡崎 伸, 小児神経医に知ってほしい「小児緩和ケアのエッセンス」, 第 59 回日本小児神経学会学術集会, 大阪, 2017.

岡崎 伸・副島賢和・新家一輝・中尾繁樹・兒玉尚子・平賀健太郎, こどもホスピスで学び支援を行うボランティアを対象とした研修効果の検証, 日本育療学会第 20 回大会, 大阪, 2016.

[図書](計 2 件)

平賀健太郎, 病弱児への復学支援の実際, 標準「病弱児の教育」テキスト, 山本昌邦・島治伸・滝川国芳編, pp147-154, ジアース教育新社, 2019.

中尾繁樹, 特別支援教育の対象とは何かをめぐる動向, 特別支援教育の到達点と可能性 2001~2016 年:学術研究からの論考, 柘植雅義・「インクルーシブ教育の未来研究会」編, 184-187, 金剛出版, 2017.

[産業財産権]

○出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

○取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ

http://osaka-kyoiku.ac.jp/university/kikaku/labo/labo_18.html

<http://www.childrenshospice.jp/2016/06/12/学生たちの参加%E3%80%80第%EF%BC%92期>

冊子

- ・新家一輝 小児がんの子どものきょうだいたち(一部担当),公益財団法人がんの子どもを守る会,公益財団法人がんの子どもを守る会,2017年03月
- ・NPO 法人しぶたね,有馬靖子,新家一輝,NPO 法人しぶたね,シブリングサポーター研修ワークショップテキスト,2016年11月

講演

- ・新家一輝 学校での医療的ケアの教育的意義について,医療的ケア実施体制構築事業 教員研修,2019年2月.
- ・新家一輝 小児緩和ケアにおけるきょうだい支援,第4回北大阪で CLASS ミーティング,2018年10月.
- ・新家一輝 重症児とともにある看護,全国重症児デイサービス・ネットワーク,第4回全国大会 in 関西,2018年2月.
- ・岡崎 伸 在宅医療ケア児とその家族をささえる,第9回小児在宅医療 親子、家族とともに,2018年1月.
- ・岡崎 伸 病気や障害を持つ子のトータルケア:医療、教育、福祉とスペシャルケア,大阪の医療的ケアを必要とするこどもと家族を支える看護研究会,2017年7月
- ・新家一輝 重い病気を抱える子どもたちの遊ぶ機会・学ぶ機会を届けるボランティア育成事業,病気を抱えた子どもの気持ち,2017年5月.

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名: 岡崎 伸

ローマ字氏名: Okazaki Shin

所属研究機関名: 地方独立行政法人大阪市民病院機構大阪市立総合医療センター(臨床研究センター),

部局名: 臨床研究センター

職名: 副部長

研究者番号(8桁): 40586161

研究分担者氏名: 副島 賢和

ローマ字氏名: Soejima Masakazu

所属研究機関名: 昭和大学

部局名: , 保健医療学部

職名: ,准教授

研究者番号(8桁): 00649436

研究分担者氏名: 中尾 繁樹

ローマ字氏名: Nakao Shigeki

所属研究機関名: 関西国際大学

部局名: 教育学部

職名: 教授

研究者番号(8桁): 50515369

研究分担者氏名：新家 一輝

ローマ字氏名：Niinomi Kazuteru

所属研究機関名：大阪大学

部局名：医学系研究科

職名：講師

研究者番号(8桁): 90547564

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。